バカ二人の異世界放浪

もっち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカ二人の異世界放浪

【Ｎコード】
Ｎ８４６２Ｙ

【作者名】
もっち

【あらすじ】
バカ二人が異世界に旅立つ話。

処女作です。行きあたりばったりでへたくそですが頑張りたいです！
生ぬるい目で見守ってください！

始まり（前書き）

頑張るッス！

始まり

「「はぁ・・・はぁ・・」」

朝。

少し肌寒い風が吹いている中で同じ学生服を着ている二人の男が走っている。

「やばいぞっ彰(アキラ)!!残り三分切った!!」

茶色の髪を目にかかる位まで伸ばしている長身の男が腕時計を見ながらが叫ぶ。

「うるせぇっ!!無駄口叩くよりも走れ翔(しょう)!!」

黒髪短髪の彰(アキラ)と呼ばれた男が叫び返す。

二人は今とても焦っていた。

三十分前。

とある学生寮。

服や漫画などが散らかっている部屋の窓際にあるベッドで黒髪の男が寝ていた。

男の名前は井田（いだ）　彰（あきら）
今日で高校二年になる。
黒髪短髪で多少整った顔立ちをしているが強面。身長１７０センチ前後。ボクサーのように鍛え上げられた体つきをしている。

「（ムク）・・・・・・」

突然上半身をあげ部屋の壁に掛けてある時計を見る。

８時１２分。

朝のＳＨＲが始まるのは８時３０分。
この学生寮は校舎から少し遠い場所にあり校舎まで約３０分。

遅刻である。

「・・・・・・やばっ！！！」

彰は飛び起きクローゼットを開け中に掛けてある学生服を取り出して着る。

「起きろ！！翔！！」

そして隣で寝ているルームメイトを起こすため怒鳴る。

彰の反対にあるドア側のベッドで茶髪の男が幸せそうに眠っていた。

彼の名前は長谷川（はせがわ）　翔（しょう）
彰と同じ高校二年。

彰のルームメイトで同じ部屋に住んでいる。
彰より少し高い身長で１８０センチ前後で細身。
此方も整った顔立ちをしており彰とは違い穏和な目つきをしている。

「ふぁ～ぁ、なんだよ彰いきなり怒鳴ってどうした？」

「どうしたじゃねーよ！！時計見ろ！！」

彰は怒鳴りながら時計を指差す。
その指を追うように翔は時計を見る。

８時１５分。
さっきより３分進んでいる。

「「遅刻だーーー！！！！！」」

始まり（後書き）

怖いよ～小説書くって怖いよ～（泣）

1話（前書き）

なかなか異世界行けません（・―・；）

1話

時間は戻り二人は走っている。

「クソぉ！始業式から遅刻何て洒落にならねぇ！！」

翔は額から汗を流し文句を言いながら走っている。

すると前から二人とは違う学生服を着ている男4、5人が二人の前に立ち道を塞ぐ。

そして走っていた二人は足を止める。

「はぁっ・・・はぁっ・・何だお前ら？」

彰は息を切らし睨みながら男達に尋ねる。

すると男達の一人が彰の目つきの悪さに多少引き気味に答える。

「お前らが井田彰と長谷川翔だな？」

「・・・だったら何だよ？」

翔も相手を睨みながら（彰ほど迫力はない）答える。「先週お前らにウチの者が二人ボコボコにされたんでなぁ？お返しをしに来たってわけよ？」

よく見ると後ろの方に立っている二人の内一人は顔に痣がありもう一人は頭に包帯を巻いている。

そして彰と翔は

「「（・・全っ然覚えてねぇ！！・・）」」

綺麗さっぱり忘れていた。

二人はよく喧嘩をしている
理由は彰の目つきだ。
彰の鋭い目つきでは、ただチラ見をしただけでも相手からは睨まれているとしか思えない。
だからよく絡まれる

そして彰といつも行動している翔も巻き込まれる

しかもそれが日常茶飯事である。

そのせいか近頃では彰も翔も「不良」として周りに知られている

「はぁ・・・だるい」

「はぁ・・・まったくだ」

ため息を吐く彰
それに同意する翔

そしてこの状況でも余裕な態度でいる彰と翔に不良達は苛立ち

「死ねやーー！！！」

不良達は彰と翔に向かって走り出す

「やるしかねぇか・・・」

「・・だな・・めんどくせぇけど」

「8時32分・・・はぁ～完璧遅刻だ。」

「マジかよ！？まーた説教だなこれ」

彰が携帯電話を開き

待受画面に表示される時刻を呟くとそれを聞いていた翔が落胆しながら答える

「しょうがねぇな、裏から入って屋上で寝ようぜ？」

「・・・だな」

翔が尋ねると彰はそれに同意し二人は歩きだした

その後ろには不良達が呻き声をあげながら倒れていた

1話（後書き）

彰と翔が分かりにくい！（ＴＯＴ）

2話

不良達に絡まれた後
二人は始業式に間に合わないと分かり開き直ってコンビニで立ち読みをしたりゲームセンターで遊んだりと寄り道をしていた

昼間から学生服でうろついているので道行く人が二人を蔑んだ目線で見ている

「そろそろ学校行こうぜ～もう昼だしよ～」

「そうだな・・それに周りの視線が痛い」

そして二人が歩き出そうとすると

「待てや！！井田！！長谷川！！」

後ろから声をかけられ二人が同時に振り向いた
そこに先程二人に絡んでいた不良がいた
そしてその後ろに不良の仲間と思われる男達が約１０人ほどいた

「井田ぁ！！長谷川ぁ！！やっと見つけたぞゴラァ！！！」

先程の不良が二人に向かって叫ぶ
その顔は最初に絡む前より腫れ上がり所々に青アザができている

「てめぇら今度こそぶち殺す！！」

そう叫んだとき後ろにいた仲間が鉄パイプやバットを構えた

周りの一般人達が驚愕して喧騒から一歩退いて見ている

「あ～ぁこんな街中で道具まで持ち出して～バッカじゃねぇ～の～？」

翔が呆れている。お前が言うなと隣で彰が翔に呆れている

「舐めやがってぇ！！お前らやっちまえ！！」

不良達が二人に殴りかかる

「またこのパターン！？でも今回はちょっと厳しくねぇか彰？」

「しょうがねぇ・・・ちょい気合入れてやるぜ翔！！」

二人が同時にニヤリと笑う

2話（後書き）

また喧嘩・・・異世界は？

3話（前書き）

ようやくです（；´д`）

3話

彰side

男が殴りかかってくる
だが大したスピードじゃないな
俺は相手の右手に合わせ姿勢を低くし相手の懐に潜り込み左アッパーを相手のアゴに叩き込む

ボクシング

それが俺の基本的な喧嘩のスタイルだ
高校に入る前にジムですこしかじった程度だが
こんな雑魚相手にてこずることはない

だが流石に数が多いな
俺はそう考えながら
鉄パイプで殴りかかってくる男の顔に
左ジャブと右ストレートを入れ相手が倒れたときに持っていた相手の鉄パイプを奪う

「翔！！生きてるか！？」

俺は相方に尋ねる

翔side

一人の男が殴ってきた
俺はそれを腕で防ぐ
そして相手が防がれたことに少し戸惑っている
その隙を見て俺は体を捻りその勢いのまま相手の腹に鋭い蹴りを入れる
相手が腹を押さえうずくまっている隙にその顔にまた蹴りを入れ相手を沈める

俺は彰とは違い格闘技何か習っていない
人より腕力の弱い俺が喧嘩で勝つために我流で見つけた俺の特技
人一倍腕力が弱い俺だがその分人一倍俺は身体が柔らかい
その柔らかさを活かし俺が鍛えたのが

足技だ

身体を鞭の様にしならせ金属バットを大きく振りかぶった男のアゴに蹴り込む
相手は白目をむき崩れるように倒れた

ふぅ～疲れた
まだまだ多いなぁ～
よしっ！！金属バットも～らい♪

「翔！！生きてるか！？」

おっと相方がお呼びだな

「お～う！！生きてるぜぇ～！！」

「翔！！流石にこの人数はきつい！！つかぶっちゃけ腹減ったし疲れた！！逃げるぞ！！」

「お～う。それに眠いしなぁ～！！」

そう言葉を交わし二人は鉄パイプと金属バットを持ったまま走り出した

「ぐっ！！・・・待てやゴラァ！！」

鼻から血を流しながら男が叫ぶ

しかし二人は無視し全速力で走り去る

「何処に逃げるんだ彰！？」

翔が彰に叫ぶ
走りながら耳元で叫ばれた彰は翔を睨みながら答える

「とりあえず学校だ！！そこ曲がれ！！」

そして二人は曲がり角を曲がるがその目の前に壁があった

「ちっ！！飛び越えるぞ翔！！」

「ちょっ！！えぇ！？マジッスか！？」

そして二人は自分の身長ほどの壁にてをつき乗り越えた

しかし二人の着地位置に黒い闇が渦巻いている大きな穴があった

「んな！？何だよこれ！！」

「イギャーーーー！！！」

そして二人は黒い大きな穴に吸い込まれるように入っていった

3話（後書き）

ちょい無理があったかのぅ」（'～、；）「

人物紹介

井田（いだ）　彰（あきら）

性別　男

年齢　１７歳

容姿　黒髪黒眼。身長１７０センチ前後で整った顔立ち。しかし目つきが悪く、よく不良に絡まれる。
筋肉のついた鍛え上げられた身体。
高校に入る前にボクシングジムに通っていた。

性格　バカ。普段は落ち着いているが、喧嘩になると暴れる。たまに真顔でボケる。頭はとても悪い。

長谷川（はせがわ）　翔（しょう）

性別　男

年齢　１７歳

容姿　茶髪で瞳の色も茶。
髪は目にかかるくらいの長さ。整った顔立ちで彰と違いいつも笑っているせいか人当たりは良い。所謂イケメン。
身長１７０後半。彰と違い細身。身体が柔らかい。

性格　バカ。彰よりよく喋る。チャラいせいであまりモテない。
頭が悪い。
ボケるしツッコム。

彰と一緒によく不良に絡まれていたので喧嘩はわりと強い。

人物紹介（後書き）

分かり難いッスねm（_　_）m

4話（前書き）

多分もう更新遅くなる」（ー〜、；）「

4話

「（ムク）・・・・・・・」

気絶していた彰が無言で体を起こす

そしてポケットの中に入れていたケータイを取り出す。

「・・・圏外か」

「（キョロキョロ）・・・・・・・・・！？」

辺りを見まわし倒れている翔を見つける。

バチンッ！！！バチンッ！！！

彰が無言で翔にビンタをする。

バチンッ！！！

バチンッ！！バチンッ！！

バチンッ！！バチンッ！！ゴスッ！！

「痛っってぇーー！！オイ彰！！てめー最後殴っただろ！？」

彰の起こし方に文句を言いながら飛び起きる翔。

それを無視し彰が口を開き喋る。

「そんなことはどうでもいい・・・周りを見ろ。此処は何処だ？」

彰が周りをみる。

翔が彰につられて周りを見る。

見渡すかぎり緑一色。

どう見ても森の中であった。

「何だこれ！？いつの間にこんな所来たんだよ！？撮影か！？ドッキリなのか！？」

翔が焦り叫ぶ。それに彰が答える。

「落ち着け・・・学校の塀を飛び越えた先にあったあの黒い穴に吸い込まれて・・・気づいたら此処にいた。ケータイも繋がらない。」

彰は気絶する前の事を思い出しながら話した。

その隣で翔はケータイを開いて見ている。

「・・・それよりもこれからどうするか考えるぞ。このままじゃ二

人とも飢死する。とりあえずこの森を出るぞ。」

彰は翔と一緒に落ちていた鉄パイプを拾い歩きだす。

「あぁ～もう！！何が何だかさっぱりわかんねぇ！！」

翔も文句を言いつつケータイをしまい歩き出す。

ガサガサッ！！

「「！？」」

二人があてもなく歩いていると後ろの茂みから音がしてふたりがふり返った。

すると二人めがけて何かが飛びかかってきていた。

「危なっ！！」

「ふげっ！！」

彰はその飛んできた者をかわし持っていた鉄パイプでその物体を殴

った。

だが翔は気付くのに遅れ飛んできた物体を顔面に喰らう。

「ちっ！！危なかったぜ・・・」

「ちょっ！？彰！？頼むから助けて！？」

彰は渋々翔の顔にへばりついている者を引き離した。

そして翔が顔をおさえながら立ち上がり、彰は持っている物を見て口を開いた。

「・・・猿？」

彰が持っているのは猿だった。

「いや見た目猿だけど・・・何か色違くね？」

その猿は彰の膝上ぐらいの大きさで毛の色が真っ赤であった。

「・・・確かに。こんな猿日本にはいないよなぁ・・」

彰は顎に手を当て考える。

「記念に一枚」

カシャッ！！

翔は真っ赤な猿と彰をケータイのカメラで撮る。

「・・バカやってんじゃねーよ。少しはお前も考えろ。」

「お前しっかりカメラに向かってピースしてるじゃねーか！？」

4話（後書き）

うまく書けない。文才無いなぁ（ＴＯＴ）

5話

「まだこの森出れないのか～？もう何時間歩いてんだよ～？」
真っ赤な毛の猿の襲撃を受けてから二人はまた歩いていた。
しかしいくら歩いても森を抜けれないことに翔がぼやく。
「・・・確かにまずいな。このままだと野宿するハメになるかもな。」

「うげぇ～！？マジかよ～・・・こんな得体の知れない生き物がウヨウヨいる森で野宿とか・・・キツい。」
翔が項垂れる。先程から歩いている二人はこの森に生息している生き物を見て驚き続けている。
元居た世界では見たことの無い生き物がいるからだ。
毛が赤い猿。角の生えた兎。異常に長い爪を持つトカゲなど。
ここまでいろんな生物に遭遇しては襲われていた。
それを鉄パイプと金属バッドで追い払ってきた。
「確かにあんな生き物地球にはいなかった・・・。じゃあもしかすると・・・ここは俺達が居た地球じゃない？」

彰は考えを口に出す。自分でも馬鹿げていると思うがそう考えずには要られなかった。

「何だって良いからよ～。とりあえず早いとこ森抜けようぜ～。森を抜ければ誰か人が居るだろ？」

翔が多少投げやりに言う。だが意外に言ってる事は正しいので彰もその考えに同意する。

そして二人が歩き出そうとしたその時。

「キャーーーーーーー！！！！！！！！！」

「「！？」」

叫び声が聞こえた。それに二人素早く反応する。

「彰！！」

「あぁ。・・・今のは。」

「「女の子の声だ！！」」

反応する所が違う気がするセリフを二人が同時に発する。

「急ぐぞ翔！！」

「解ってるよ！！」

二人は先程まで歩き疲れていた事が嘘のように駆け出した。

そして叫び声が聞こえた所についた二人が目にしたのは、一人の女の子が数匹の狼に囲まれていて一匹が少女に飛びかかる寸前だった。

「まずいぞっ！？彰！！」

「あぁ！！解ってんよ！！」

二人は少女と狼の間に割って入る。そして飛びかかってきた一匹を彰が持っている鉄パイプで殴りつける。

うまく鉄パイプは頭に当たり狼は頭から血を流し地面に倒れる。起き上がってこない所を見るとどうやら絶命したようだ。

そしていきなりの乱入者に狼は戸惑い様子を見ている。

「おい！！そこのお前！！大丈夫か！？」

「えぇ！？・・あっと・・・は・・はい。なんとか。」

「ふい～。間一髪だな～。」

彰が少女に無事を確認し少女の答えを聞いて翔が安堵のため息を吐く。

「安心するのはまだ早いぜ翔。あちらさんは獲物を取られて不機嫌

っぽい。」

狼達は突如現れた二人に戸惑っていたが、仲間が一匹殺された事で、少女よりまず先に彰と翔を敵と認識したようだ。

「マジかよ。しょうがねえ!!相手してやんぜ!!」

「どっからでもかかってこいや!!」

二人もただやられる気は更々無いようで、持っていた鉄パイプと金属バットを構える。

「む・・無茶ですよ!?たった二人でハウンドウルフを相手にするなんて!!」

少女が焦りながら二人に言うがもう二人の耳にその言葉は届かない。

彰ｓｉｄｅ

俺と翔は二人目の前にいる狼の群れと睨み合う。

相手はざっと5匹。その内一匹は一番後ろから俺達を見ている。

他と比べて明らかに体の大きさが違う。アイツがボスか。

「行くぜ翔。死ぬんじゃねえぞ。」

「はっ！！余裕だぜ。」

俺達は軽口を叩き合い狼の群れに突っ込んだ。

俺が受け持つは右側の二匹。一匹は目の前に、もう一匹は3メートルほど後ろ。

こういった奴等は連携されると面倒だそれを喰らう前に一気に潰す！！

俺は走り出した勢いのまま目の前の狼に鉄パイプを降り下ろす。

だがその一撃は読まれていて難なくかわされてしまう。

そして狼は前足の鋭い爪で俺の首元を狙い飛びかかる。

だが

「甘え！！」

俺はそれを横にかわしカウンターを合わせるように狼の首を掴み地面に叩きつける。

うまく狼の頭部を地面に叩きつけ、狼は気絶する。

そしてすぐに次の標的に目を向けるが、

――速い！！

気付いた時には狼は目の前にいて鋭い爪で襲いかかってくる。
俺は何とか横に転がり避けるが、少しかすったのか、制服の肩口が少し破れ肩から血が流れでている。

危ねぇ～！？
少しヒヤッとしたぜ。

だがあと一匹。
ボス狼は動いていない。

俺は目の前の狼に視線を戻す。

狼は動かず此方の出方を待っている。

いいぜ。来ないならこっちから行ってやんよ！！

俺は鉄パイプを狼の頭目掛けて降り下ろすがやはり避けられる。だがまた直ぐに狼に向かって俺は鉄パイプを振るう。

横に。縦に。斜めに。振り上げ。降り下ろし。

型なんか知らない。
滅茶苦茶に振り回す。
その度に狼に避けられる。

そして俺の手が止まり、その隙に狼は俺の首を狙い、口を大きく開

け牙を剥き出し、飛びかかってくる。

「危ねえ！！」

俺は鉄パイプを素早く引き戻し狼の攻撃を防ぐ。

間一髪、狼は俺の首ではなく鉄パイプに噛みつく。

そして俺は狼を振り落とし、狼が怯んだ隙に鉄パイプを狼に降り下ろす。

今回は狼の腹部に当たり骨の折れる鈍い感触が俺の手に伝わってくる。

モロに俺の一撃を受けた狼は、口から多少の血を吐き、もう立ち上がる事もできないようだ。

少し手こずったが何とか倒した。後は翔の方だ。

俺は辺りを見回し翔を探す。

翔ｓｉｄｅ

ハァ〜。この変な森に来て、色んな生物に襲われて、やっと人が居たと思ったらこっちも襲われてて。

ついてねえな〜。

しかも今回は何か強そうな狼だし。

後ろのデカイやつ絶対ボスだよな～？
まぁ、まずは目の前の二匹が先だな。

「オラオラッ！！チャッチャとかかってこいや！！」

挑発するも警戒して動かない。面倒だな、俺から行くか。
俺は金属バットを構え二匹に向かって走り出す。
先ずは右側。その直ぐに横二匹目。
俺はバットを降り下ろす。
しかし避けられ距離をとられる。
それに合わせて直ぐに二匹目が飛びかかってくる。

その動きは読めてるぜ！！

俺は振り向き様に飛んできた狼に蹴りを放つ。

それが見事に二匹目の腹にあたる。

中々の手応え。
しかし蹴りを喰らった狼はヨロヨロになりながらも立ち上がる。
おいおい！！マジかよ！？いい感じに決まったと思ったのに！！
俺が愕然としていると後ろから一匹、狼が近づいてくる。

ヤバッ！！

そう感じ後ろを振り向くが遅かった。
一匹目が前足の爪で俺の腕目掛けて襲いかかる。
咄嗟に右手のバットを前に出し庇うが、少し腕を裂かれた。
肘のすぐ下を切られ制服と腕の肉が裂け、血が滴り落ちる。
一瞬痛みで顔が歪むが、直ぐに立て直し、襲いかかってきた狼をサッカーボールの様に蹴り上げる。
蹴りをモロに喰らった狼は蹴られた勢いのまま木にぶつかり起き上がってこない。
ナイスシュートってか？
そんな事を考えながら辺りを見回し二匹目を捜す。

――――！！マズイッ！！
俺には敵わないと悟ったのか二匹目は俺の横を走り抜け後ろに居た少女に襲いかかろうとする。
やばい！！追いつかねえ！！

「クソッ！！！間に合えーーーー！！！！！！！！」

俺は持っていたバットを全力で狼に投げる。

全力で投げられたバットは狼に命中する。

狼は起き上がらない。

「ふぅ～。マジで焦った。」

俺は額の汗を制服の袖で拭う。

とりあえず二匹とも倒したぜ。

辺りを見回し彰を見つける。彰も二匹とも倒したようだ。多少手こずったのか制服の肩の部分が裂け、血を流している。

「こっちは終わったぜ～。ちょい手こずったけど。」

俺は狼に引っ掻かれた腕を彰に見せながら言う。

やっぱスゲー痛い。

「こっちもだ。少し侮っていたようだわ。超痛え。」

彰も顔を歪め答える。

「さてと、最後はアイツか。」

「ああ。ボスの登場だな。」

5話（後書き）

戦闘って難しいね！！

6話

？side

――――凄い。

私は二人を見ていてこの一言しか頭に無かった。

私はこの近くの村に住んでいる。最近村をハウンドウルフに襲撃されて、村の大人達が何とか追い払ったけど、被害は小さくなかった。畑は荒らされ、ハウンドウルフと対峙した村の大人達は皆、怪我をした。

幸い、死人は出なかったけど、重傷の人もいて村にある薬草だけじゃ足りなかった。

私はこの森に生えている薬草を摘みにこの森に入った。危ないのは解っていたけど、じっとしていられなかった。

薬草を摘んでいるときに私はハウンドウルフの群れに見つかり、追い詰められ、殺される寸前だった。

でも、間一髪で見たことのない服装の二人組に助けられた。

見たこともない武器を手にたった二人でハウンドウルフを相手に一歩退かない。

それどころか、たった数分で『魔法』も使わずに大の大人でも追い払うのがやっとな四匹のハウンドウルフを倒した。

凄かった。

しかし二人は急に真剣な表情になり、前に向き直る。
その視線の先には二人の身長より体の大きいハウンドウルフがいた。
群れの長。
多分、他の四匹とは比べ物にならないほど強い。
私でも解る。
それでも二人は戦う気だ。
止めたい。
止めて早くこの場所から逃げたい。
でも、怖くて立てない。
もう私には二人の勝利を祈るしか出来ない。

ハウンドウルフのボスと向き合う二人の頬に汗が流れる。

強い。
それは一目見て解った。
だがここで逃げても殺される。
ならヤるしかない。

二人は真剣な表情で鉄パイプとバットを構える。

「ははは・・・。こいつはやべえな。」

「・・・ああ。」

翔は乾いた笑いしか出てこない。
彰も一言答えるだけ。

今までは不良に喧嘩を売られても相手かこっちが倒れればそこで終了だった。
命までは取らないし、取られない。
しかし、この森に来てからは違う。
これは殺し合い。
生きるか、死ぬか、それだけだった。

「・・・行くぜ翔。死ぬなよ。」

「任せろ。俺とお前がいるんだ。イケるぜ。」

彰が翔に問いかけ、翔はその問いに不適な笑みを浮かべ、答える。

「ああ・・・。俺とお前が組めば・・・。」

「「無敵だ」」

二人はボス目掛けて駆ける。

彰が右から相手の背後に回る。

翔は正面からバットで殴りかかる。

「うおらあぁぁぁ！！！！」

翔が殴りかかる。バットはハウンドウルフの前足に当たるが。

「か・硬え！！」

全力で振るったバットを直撃したにも関わらず、ハウンドウルフは表情一つ変えずに、前足の爪を翔目掛けて振るう。

翔は紙一重で避け、後ろに転がり距離をとる。

「ダメだ彰！！全然効かねえ！！」

翔が彰に叫ぶが、彰はハウンドウルフの後ろ足に殴りかかる。だがその攻撃もハウンドウルフには効いていない。

彰も一旦後ろに距離をとり、翔の隣に移動する。

「クソッ！！全然効いてねえ！！」

「どうすんだ彰！！このままじゃ殺られるぞ！！」

「！！・・翔！！前！！」

「！？」

翔がハウンドウルフに向き直る。
そして目に入ったのは右前足を振り上げている姿。

咄嗟にバットで庇う。
腕に衝撃が走り、体が浮き上がる。体を殴り飛ばされた。そのまま木に叩きつけられ、肺の中の酸素がすべて吐き出される。

「ッーーー！！！」

「翔ぉ！！」

彰が殴り飛ばされた翔を心配し、ハウンドウルフから集中を切らした。
その隙を見逃さずハウンドウルフは彰も右前足で殴りかかる。
彰は鉄パイプで防ぐ。
翔のように飛ばされることは無かったが、殴られた勢いを殺し切れず、地面を転がる。

防御に使った鉄パイプは真ん中から折れ曲がり、もはや使い物にならない。

彰はフラフラになりながら立ち上がる。

「クソッ！！強すぎだろ！！」

「あ〝ぁ～背中超痛え～。」

涙目で背中を擦りながら翔が彰に近寄る。
持っているバットは曲がり、所々へこんでいる。

「強え何てもんじゃねえだろ！？反則だコノヤロー！！」

「・・・ぶっ殺す！！」

二人で正面から突撃する。彰が殴る。翔が蹴る。彰が殴るを繰り返す。
しかしハウンドウルフには全く効いておらず、ハウンドウルフは鬱陶しい虫を潰すように前足を振るう。

「ぐっ！！」

「があっ！！」

二人同時に吹き飛ばされる。
二人はもう立ち上がる力も残っていない。

そしてハウンドウルフは彰と翔を無視し、座り込んでいる少女に近づく。

「グルルルッ！！」

「あ・・・あぁ・・。」

少女は目に涙を溜め、ハウンドウルフを見つめる。

「・・・！？クソッ！！やめろっ！！」

「おい！！こっち向けよテメェ！！」

二人が叫ぶ。しかしハウンドウルフは聞いていない。

そしてハウンドウルフは前足を振り上げる。

「「やめろおおぉぉ！！！！！！」」

二人が腹の底から叫ぶ。

その時、二人の体を淡く青白い光が包んだ。

6話（後書き）

やっぱり難しい（＜＿＞）

7話

「「うおらあぁぁぁ！！！」」

二人は一気にハウンドウルフと距離を詰め、ハウンドウルフの横腹を同時に殴り、蹴る。
ハウンドウルフは吹き飛ばされ地面を転がる。

「何だ！？体がスゲー軽いっ！！」

「・・・ああ。それに・・・力が溢れてる。」

先程まで効いていなかった攻撃でハウンドウルフを吹き飛ばし、二人は驚愕する。

「何か身体が超光ってる！？何だこれ！？」

「そ・・それは・・・もしかして『魔力』！？」

少女が驚愕に目を見開き呟く。

「「魔力？」」

ウオオオォォォ！！！！！！！！

三人が話しているとハウンドウルフは起き上がり雄叫びを上げる。

「・・・話は後だ。先ずはあのクソ犬を潰す。」

「ああ。今度は負ける気がしねぇ！！」

二人はハウンドウルフと向き合う。

「さぁ！！第二ラウンドだ！！」

「乗ってきたぜえ！！」

二人はハウンドウルフに向けて走る。

そこからの二人の動きは凄まじかった。

「喰らえクソ犬！！」

ハウンドウルフの攻撃を掻い潜り、懐に入った彰の腹部への一撃。

「こっちだこっち！！」

彰に気を取られている隙に翔が飛び上がり、ハウンドウルフの首筋に足を降り下ろす。

「俺を忘れんじゃねえ！！」

空中にいる翔に攻撃しようとしているハウンドウルフに向かって、また彰が拳での一撃。

二人はハウンドウルフを翻弄していた。
ハウンドウルフはもう満身創痍だった。

「次で決めるぜ翔！！」

「おう！！行くぜ彰！！」

二人はまたハウンドウルフに向かって走る。
ハウンドウルフは力を振り絞り前足で払う。
だが二人はその攻撃を左右に避ける。ハウンドウルフが二人を見失った。

「「喰らえぇぇーーー！！！！」」

翔が右からハウンドウルフの顔に蹴りを入れ、彰が左から右ストレートを顔面に叩き込む。
そしてハウンドウルフはフラフラと後ろに下がっていき、最後には地面に倒れ起き上がらなくなった。

「ハァ・・・ハァ・・・やったか！？」

「・・・ああ。俺達の勝ちだ！！」

二人は勝利を確信すると二人同時に地面に仰向けに倒れる。

？side

す・・・凄い。

たった二人で、しかも素手でハウンドウルフの長を倒しちゃった。

それにあの体の光。

あれって魔力！？

肉眼で見えるほどの魔力って。

ああ！！そんな事より二人は無事なの！？

私は急いで仰向けに倒れている二人に駆け寄る。

「だ・・・大丈夫・・・ですか？」

私は心配で二人に声を掛ける。

い・・・生きてるよね？

すると二人は目を開きゆっくり口を開き言った。

「「・・・は。」」

「は？」

は？

「「腹へった・・・・。」」

はい？

二人は凄い勢いで先程倒したハウンドウルフの丸焼きにカブリついている。

そして少女はその二人を見て苦笑いを浮かべ口を開く。

「あの！！・・・助けて頂いて有り難う御座います！！私この近くのターナ村に住むフィナって言います！！」

フィナと名乗る少女が二人に軽い自己紹介をする。

彰と翔より2つほど年下のようで、太陽の光で輝く金色の髪を肩より少し伸ばしている。金髪碧眼で少し垂れ目で大人しそうな顔立ちをしている可愛い系の美少女。

「（・・・なぁ彰？どう見ても外国人だよな？金髪碧眼とか・・・何で日本語通じてんの？凄い可愛いし。）」

「（俺に聞くなよ。でも、どう見ても日本人ではねーな。可愛いには同意。）」

二人がコソコソ話し合っている。それをみてフィナが首を傾げている。動きが小動物のようで可愛らしい。

「とりあえず自己紹介だな。俺は彰。こっちは翔。二人で森の中をさ迷っていた所だ。」

「そしたら君があの狼に襲われそうになってたのを見つけたってわけ。君はどうしてこの森に？迷子？」

二人は簡潔に今までの事を説明し翔はフィナに問いかける。

「ち！！違いますよ！！／／／私はこの森に薬草を採りに来たんです！！迷子じゃありません！！」

フィナは顔を真っ赤にし頬を膨らませ怒りながら否定する。怒っているが全く怖くない。逆に可愛らしかった。

「あぁごめんごめん。でもなんでさっきの狼とか危ないのがいるこの森に薬草を？」

翔が疑問に思い、問いかける。フィナは少し悲しそうに顔を俯かせ答える。

「・・・実は、つい先日にあのハウンドウルフに村が襲われて・・・。なんとか追い払ったんですけど、怪我人が沢山でて、村にある薬草だけじゃ足りなくて・・・。」

フィナが目に涙を溜めこの森にきた経緯を話す。

それを聞いた二人は

「「（すっごい良い子！！）」」

フィナに見られないよう後ろを向き涙を流していた。

「で・・でもっ！！お二人がハウンドウルフを倒してくれて良かったです！！これで村は平和です！！」

フィナがまた二人に深々と頭を下げる。

「・・・頭を上げてくれ。それよりもフィナ。何個か聞きたいことがあるんだが・・・」

「私で良ければ何でも聞いて下さい！！」

フィナが勢いよく頭を上げ目を輝かせながら答える。

「そ・・そうか。それよりも、この森を早く出よう。長居してるとまた襲われるかもしれない。」

「だな～。ごめんフィナちゃん。案内してくれない？」

フィナの勢いに若干たじろぎながら彰が提案し翔もそれに同意し、フィナに頼む。

「わかりました！！村に案内します！！ついて来てください！！」

フィナは立ち上がり二人をの前に立ち先に進む。

二人はそれをゆっくり追いかける。

7話（後書き）

名前とかは全部閃きから（「―＋」）

8話

あれから数十分。

今回は襲われる事なく三人は森を抜ける。

三人の目の前には木で作られた門と、村を囲うように木の柵が立ち並んでいた。

「フィナ！！」

そして三人が門に近づくと一人の金髪の女性がこちらを見て、目に涙を溜め、口を手で抑えこちらに走ってくる。

「お母さん！！」

どうやら女性はフィナの母親らしい。

そして二人は抱き合い二人揃って涙を流した。

「あぁ・・・一人で森に入って。心配したのよフィナ。」

「・・・ごめんなさい。ハウンドウルフに襲われそうになった所をあの人達が助けてくれたの！！」

「ハウンドウルフ！？大丈夫フィナ！？怪我はない！？」

フィナの母親らしい女性がフィナの体をペタペタ触り怪我がないか確める。
そして女性は二人に向き直り頭を下げた。
「娘を助けて頂いて有り難う御座います。私はフィナの母でフィアーナと言います。」
そして二人はフィアーナさんを見て思った。
「「（若っ！？）」」
フィアーナと同じ金髪碧眼で髪を背中まで伸ばしている。どことなく雰囲気がフィナに似ている。
「何かお礼がしたいのでどうぞ我が家にいらしてください。」
そして四人は門をくぐり村へ入っていった。

彰と翔は村を見て驚いた。
どの家もすべて木で作られていて村の隅の方に大きな畑があった。
「（彰！？スゲーぞ！！何かゲームみたいだ！！）」
「（確かに凄いな。日本じゃあり得ない。）」
そして四人はひとつの家の前で立ち止まる。

「ここが私達の家です。どうぞ中へ。何もない家ですが。」

「「お・・お邪魔しまーす・・。」」

二人はおずおずと家に入る。家の中央にある大きなテーブルに四人は座る。

「改めてお礼をさせて下さい。娘を助けて頂いて有り難う御座います。」

フィアーナが頭を下げそれに続いてフィナが頭を下げる。

「い・・いやいや。頭を上げて下さい。そんな大したことはしてませんよ。」

翔は必死に二人に頭を上げさせる。
そして今まで黙っていた彰が口を開く。

「それより。フィナとフィアーナさん。二人に聞きたいことが幾つかあります。」

「この世界の名前を教えてください。」

彰の質問を聞き二人がキョトンとする。
がいち早く正気を取り戻したフィナが答える。

「え・・えっと私達が住むこの世界は一般的には『ストラス』と呼ばれています。」

それを聞いた翔は目を見開き驚いていた。
彰は予想してはいたようだが、少し動揺している。

「じゃ・・じゃあ！！この世界の常識とかを教えてくれ！！」

彰は普通とは少しずれた事を聞く。
フィナは戸惑いながら話始める。

「まずこの世界ストラスには一つの大陸に種族二つが存在しています。
私達、人族と魔族と呼ばれる魔人族です。見た目は耳が尖っていて皆が黒髪と、あまり人と変わりません。
魔族は基本北陸にいます。・・・えぇっと、大丈夫ですか？」

二人はフィナの説明を頭から煙を出しながら聞いていた。
脳の容量を越えたようだ。

「あ・・あのハウンドウルフを倒した時のあの光はなんだったんだ！？」

翔が話を変える。

「あれは魔力と呼ばれる人が生まれた時から体内にあるエネルギーのようなものです。人は魔力を使う事で魔法が使えますが魔人族は魔力を持っていますが魔法が使えません。その代わり、魔人族は身体能力が人より非常に高いです。あと魔力の多さは一人ずつ違いま

す。」

フィナが解りやすいよう、かみ砕いて説明する。

二人は意味が理解できたようでしきりに頷く。

「（魔法なんてあるのかよ！？完璧ゲームじゃん。）」

「（ああ・・・。どうやら俺達はとんでもない所に来ちまったようだな。）」

「これで大体ですね。何故こんな事を？」

フィナが当然の聞いてきた彰を疑問に思い聞いた。

彰は本当の事を言うべきか迷ったが、二人なら大丈夫だと思い答えた。

「信じられないかも知れないが、俺達は異世界から来たんだ。」

「「えぇ！？」」

フィナとフィアーナさんが驚く。しかし彰は続ける。

「俺達がいた世界には、魔物なんて居ないし、魔法なんて存在しない。」

彰が話す。隣で翔が頷いている。

「それなら・・・お二人はこれからどうするんですか？」

フィナが二人に問いかける。

「とりあえず、この世界を色々旅して元の世界に帰る方法を探すよ。」

彰がこれからの事を考え、答える。

「それなら冒険者になるのがお薦めです！！」

「「冒険者？」」

二人は聞きなれない言葉に疑問を持ち、聞き返す。

「はい！！この村にはありませんが、もう少し大きい街に行けば『ギルド』という建物があってそこに行けば冒険者になれます！！」

フィナが目を輝かせ二人に詰め寄りながら言った。

「冒険者って何するの？」

翔が若干引きながら聞く。

「あまり分かりませんが、主に魔物の討伐や護衛の依頼などをこなす仕事です。この近くだと北に行けば大きな商業都市カロムにギルドがありますね。」

フィナが答える。

「今日はもう遅いですし、お話はここまでですね。お二人とも今日は家に泊まっていってください。」

隣で話を聞いていたフィアーナが手を叩き遮り話は終わった。

辺りは暗くなり、人も動物達も寝静まった夜中。

二つ並んだベッドの上に彰と翔は眠れずに目を開け、天井を見つめる。

「・・・なあ彰。これからどうすんだ？」

静寂を切り裂くように翔が口を開く。

「・・・明日、この村を出る。」

彰は天井を見つめたまま翔に答える。

「でも何処に行くんだよ？」

「まずは商業都市のギルドを目指そう。そこで旅の支度をして・・・。そっからはその時にでも考える。」

「うーんそうだな～。そうするか。それじゃ俺はもう寝る。」

翔はそれだけ言ってすぐに眠りについた。

彰は何かを考え、彰が眠りについたのは大分後だった。

8話（後書き）

これが精一杯（；´д`）

9話

「「色々お世話になりました。」」

彰と翔がフィナとフィアーナさんに頭を下げる。

「もう行っちゃうんですね。」

フィナが悲しげに顔を俯かせ呟いた。

「彰さん。翔さん。どうかこれを受け取ってください。」

フィアーナが布に包まれた物を差し出す。

布を広げると彰には銀色に輝く鉄製のガントレット、翔も同じように銀色に輝いている鉄製のブーツ。

「三年前に亡くなった元冒険者の夫のお古ですが、ぜひ受け取ってください。」

フィアーナが笑顔で言った。

彰と翔は早速装備した。

「軽い。」

見た目とは裏腹にとても軽く、装備してもまるで違和感がない。

「それは『ミスリル』と言う希少な鉱石で出来ています。丈夫で魔力伝導率が高く、必ず二人の役に立つはずです。」

「「有り難うございます！！」」

二人がまた深々と頭を下げる。

「彰さん翔さん！！無事に帰れると良いですね！！」

フィナが少し目に涙を溜め、それでも笑顔で言う。

「ああ。ありがとう。それじゃあ行ってきます。」

「またいつか会いましょう！！」

その言葉を最後に二人は歩き出す。

後ろを振り返るとフィナとフィアーナさんが手を振って見送ってくれていた。

二人は手を振り返し、また歩き出した。

「で、そのカロムの街はどっちだ？」

見晴らしのいい街道でフィアーナさんに貰った地図を広げ唸っている翔に彰が聞く。

「うぅ～ん。これが村だから～多分こっち！！」

翔が現在地を確認しながら地図をみて指を指す。

彰が地図を覗き見る。

翔が指を指している方角は正解だった。

「翔のくせに正解じゃねーか。」

「お前地図分かるんじゃねーか！何で聞いたんだよ！？」

翔が彰に文句を言うが彰は無視して歩き続ける。

「それにしてもビックリだな～。魔法があるなんて」

「そうだな。せっかくだし使ってみたいな。」

二人は他愛もない会話をしながら歩いている。

「ん？何だあれ？」

翔の視線の先にはボロい服を着てバンダナを頭に巻きダガーを持った明らかに盗賊な男達がいた。

「な～んかこっち見てるぞ。嫌な予感しかしね～。」

「いく先々でこれかよ。お前何かとり憑いてんじゃねえか？」

「お前にだけは言われたくねえよ。」

二人が軽口を叩いていると盗賊達が二人の目の前にきた。

「お前ら中々良いもん着けてるなあ？」

盗賊の一人が彰が着けているガントレットと翔のブーツを見て言う。

「あぁ？何だおめえら？」

彰はこの展開を予想していて若干苛ついていた。

「生意気なガキだな。自分の立場わかってんのか？ソレ渡せば痛い目みなくてすむぜ？」

盗賊は自分の後ろにいる仲間を見ながら二人を見下した。

ブチッ！！！

何かが切れる音とともに、彰は目の前の盗賊を殴り飛ばした。

後ろを向いていた盗賊は避ける暇なく、顔面に彰の攻撃を喰らい吹っ飛び、地面を転がり動かなくなった。

それを見た翔があきれた様子でため息を吐く。

「これは見ず知らずの俺らに優しくしてくれた人から貰った大切な物なんだよ！それを寄越せだぁ！？ふざけんなボケッ！！」

彰は完全にキレていた。それを見た盗賊は彰の怒声と迫力に若干ビビりながら二人を囲む。

「一、二、三・・五人か。まあこの装備を試すのにはちょうどいいか。」

二人は背中を合わせ盗賊と向き合う。

「このヤロォーーー！！」

先に動いたのは盗賊だった。右手のダガーを目の前に突きだし、彰の心臓に突きを狙う。

彰はそのダガーを左手のガントレットで弾き、相手の顎に拳を入れる。

そして脳が揺れ、怯んでいる盗賊に、彰と翔が位置を入れ替わり、そのまま翔が盗賊にトドメの蹴りを放つ。

盗賊は顔面から地面にぶつかり気絶する。

その間、翔に突進していた盗賊は翔と場所を入れ替わった彰に標的が代わり、一瞬戸惑う。

彰はその一瞬を見逃さず、盗賊にボディブロー。腹部への攻撃に悶えている盗賊に続け様に右ストレートを叩き込み、盗賊は膝から崩れ落ちる。

「やっぱスゲーな。威力が段違いだ。」

「ああ。それに拳を痛めないで済む。」

二人が喋っていると、盗賊が次は二人同時に走ってくる。

翔は相手のダガーを持つ腕の手首に蹴りを当て相手が痛みに耐えきれずダガーを落とす。

彰は相手のダガーを持つ腕をつかみ、捻る。盗賊は余りの痛みにダガーを落とした。

そして彰は右ストレートを、翔は後ろ回し蹴りを相手に叩き込む。

盗賊二人は立ち上がる事が出来ず、地面に倒れ伏す。

そして二人は最後の一人に向き直る。

盗賊は力量の差に敵わないと気づき、一人背を向け逃げた。

「逃げてんじゃねーよ情けねえ。」

彰は落ちていた野球ボール位の大きさの石を拾い、逃げる盗賊向かって投げた。

見事頭に当たり盗賊は倒れ、意識を失った。

「たくっ！！弱すぎだろ！？そんな腕で喧嘩売ってくるな雑魚！！」

彰が気絶している盗賊に向かって文句を言う。

「しょうがねーよ。なんかハウンドウルフ倒してから体がスゲー軽いし、前より力ついてるし、魔力のおかげか？」

翔がピョンピョン跳び跳ね体の性能を試している。
「とりあえず倒したけど、どうするよコイツら？」
翔が倒した盗賊を見て彰に聞く。
「うーん。盗賊みたいだし街に連れていって見よう。懸賞金とかあるかもしれないし。」
「お～その発想はなかったわ～。」
「・・・バカが。」
彰の提案に翔が感心している。それに彰が毒づく。
「何か縛れる物取ってこい。木の蔓（つる）でいーぞ。」
彰は盗賊をひこずりまとめる。そして翔が拾ってきた頑丈な蔓を縄がわりに盗賊を纏めて縛る。
「よし！これでいいだろ？翔。持て。」
「俺が！？何で！？彰が持てよ！やだよ俺。」
「うーん。街はこっちか。」
彰は翔を無視して地図を見ながら歩き始めた。
「無視すんなよ！あ〝ぁ～クソ重い！！」
翔が盗賊を引っ張り、彰を追いかけた。

「俺の予想だともうすぐ見えてくる筈・・。」

盗賊の襲撃から三十分ほどが経ち、地図を見ていた彰が呟いた。

「離せやコラー！！まだ捕まりたくねえよー！！」

「ウルセー！！おとなしくしろ！！」

翔は目が覚めた盗賊の一人を殴って黙らせていた。

「おっ！！あれじゃねーか！？」

彰が指差す方にはコンクリートのような物で作られた門があり、門の周りを五メートル位の壁が街を囲うように建てられていた。

「ふぃ～。やっと着いた。早くコイツら引き渡そうぜ。」

「そうだな。誰か人を・・・おっ！！アレは所謂門番じゃねーか？」

彰の視線に気づき、西洋風の鎧を着て槍を持っている門番が二人に近づいてきた。

「商業都市カロムにようこそ。この街には何の用で？」

「いや～。冒険者になりたくてこの街のギルド目指して来たんですけど。道中で盗賊捕まえて・・。」

門番が二人に話しかける。意外と気さくな門番に翔が笑顔で答え後ろの盗賊に視線を向ける。

「ほぉ～。コイツらをたった二人で・・・。」

翔の後ろの盗賊を見て門番が驚いていた。

「それで、コイツらをどうすれば良いですか？」

彰が門番に聞く。

「多分コイツら、最近ここらで暴れてる噂の盗賊だな。確かギルドから懸賞金が出てた筈・・・おっ！これこれ。」

門番が懐から数枚紙を取り出す。

その紙には二人が捕まえた盗賊の顔の似顔絵が書かれていた。

「いやぁ助かったよ。コイツらに被害にあった人はそう少くない。ギルドに連絡しておくから懸賞金はギルドで受け取ってくれ。」

門番は二人から盗賊を預かり、二人に言った。

「では改めて、ようこそ商業都市カロムへ。賑やかでいい街だ。楽しんでいってくれ。」

門番が合図を送り門を開けさせ、二人は門をくぐり、街の中へ入った。

１０話

門番から賑やかだと聞いていたが、賑やかなどと言うレベルでは無かった。

まるで祭りのような騒がしさに、彰と翔は二人して驚き立ち尽くしていた。

「やべえよ・・・。何だこの街？スゲー楽しそうじゃん。」

いち早く正気に戻った翔が街の騒ぎに目を輝かせ呟く。

「祭りでもしてるのか？でも門番の人はそんな事言ってなかった・・・。もしかしてこれがこの街では普通なのか？」

「んな事いいから早く見てまわろーぜ！あ～何かワクワクする！」

気づいたら、翔がもう歩き出している。彰も考えるのを止め、翔に続く。

「その前にギルド行くぞ。冒険者登録しないといけないし、何より金がない。街を見るのは懸賞金貰った後だ。」

「そうか！じゃあ早く行こうぜ！」

「待て。お前はギルドの場所がわかるのか？」

彰が騒がしく若干鬱陶しい翔に問う。
それを聞いて翔は黙ってしまう。

「や・・やべーよ！場所わかんねーよ俺！？」

「慌てるな。お前みたいなバカとは違い、こんな事もあろうかと、俺が門番さんから聞いておいた。感謝しろ。」

「ハハァー！」

彰がふんぞり返り、翔が彰に土下座し、彰を拝んでいる。
そんな二人を見て、周囲の人は白い目で二人を見る。
それに気づかず翔は立ち上がり聞く。

「で！ギルドは何処よ？」

「真っ直ぐ行けば看板があるから誰でも分かるってよ。」

「何だそれ！？俺の感謝の気持ちを返せ！！」

「よし！！行くぜ！！」

「また無視か！？」

そして二人は歩き出した。

「ここか。」

「お～何かそれっぽい。」

祭りの屋台のような店に目移りしながら二人はギルドについた。

そこには屋根に大きな看板を付けた酒場のような店があった。

「よしっ！突入～。」

翔が扉を開けギルドに入った。

ギルドの中はまさに酒場だった。

幾つものテーブルにゴツイ肉付きをした、鎧姿の体に傷痕の多い男達がジョッキを片手に会話を楽しんでいる。

だが、ギルドに二人が入ってきた瞬間、皆会話をやめ入ってきた彰と翔に視線を向ける。

「・・・何か、気まずい。」

「ああ。見られているな。」

二人はギルド全員の視線と沈黙に戸惑う。

「それより早く冒険者登録するぞ。受付は・・・あれか。」

「待て待て待て～い。置いてくなばかやろ～。」

彰が周りを見回し受付らしき所に歩いていく。

翔がそれに続き、二人は受付についた。

そこにはギルド員の制服だろうウェイトレス姿の茶髪の美人な女性

が立っていた。

「ようこそギルドへ。私はギルドの受付を担当しますセリアです。今日は何用で？」

セリアと名乗る女性が笑顔で二人に対応する。

美人を見て翔のテンションが急上昇し、翔が答える。

「はいは～い！冒険者登録しに来ました～！」

「五月蝿い。少し黙れバカ翔。あと、盗賊の懸賞金を受け取りに来た。門番から連絡が来ている筈だが・・。」

彰が翔に拳骨を入れ黙らせ、懸賞金の事を尋ねる。

「ああ！あなた達が盗賊を捕まえた方々でしたか！少しお待ちください。」

そう言ってセリアさんは奥に入り、すぐに手に膨らんだ袋を持ち戻ってきた。

「こちらが懸賞金になります。あとは冒険者登録でしたね。それではこのカードに血を一滴垂らして下さい。」

「「血？」」

セリアさんは懐から透明なカードを差し出し、二人に渡し説明する。

「はい。血液には多くの魔力が含まれています。魔力は一人一人に特徴があり、カードに血を垂らす事でその個人特性のカードになります。これを『ギルドカード』と呼びます。」

「つまりあれか。身分証みたいな感じ・・・？」

「はい。簡単に言えばそんな感じです。」

彰には難しく、それっぽい事を言い、セリアさんは苦笑いでそれを肯定する。

二人は親指を少し噛み千切り、カードに血を垂らす。

血はカードの上に乗ると徐々にカードに染みるように消える。

「はい。これで登録は済みました。カードを無くしたり、破損させたりしたら再発行しなければなりません。再発行には多少のお金がかかるのでお気をつけて。」

セリアさんが二人に注意し、二人はそれに頷いた。

「今なら二人の魔力属性を調べれますがどうします？」

「「魔力属性？」」

彰と翔が聞き慣れない単語に首を傾げる。

「ご存知無いんですか？」

「すまん。出来れば説明を頼む。」

セリアが驚き、彰が説明を求める。セリアは笑顔で了承し、話し始める。

「魔力属性とはその名の通り、魔力の属性です。魔力には火。水。風。土。他にも珍しい雷と光と闇。魔力にはこれらの属性があります。最初の四つは鍛えればある程度は魔力があれば誰でも使用出来ますが、雷と光と闇は限られた人にしか使えません。では、この水晶に手を置き魔力を流して下さい。そうすれば二人の得意とする魔力属性が分かります。」

それを聞いて二人は水晶に手を置いた。

すると彰が触る水晶は黒い靄(もや)が蠢き、翔が触る水晶からは強く輝く光が出ていた。

「え！？」

「「え？」」

セリアが二人の水晶を見て驚き思わず声が上がる。

それに反射的に二人も声を上げる。

「まさか光と闇だなんて・・・私始めてみました。」

セリアが落ち着きを取り戻し喋る。

「あの～何かまずかったですか？」

翔がセリアに恐る恐る質問する。

「いえ、ただ話には聞いていましたが、光と闇属性何て見るのは初めてで・・・ビックリしました。」

「これはあまり人に知られない方が良いか？」

彰がセリアに聞く。

それにセリアが真剣な眼差しで答える。

「はい。先程話したように光と闇は希少な属性です。あまり言い触らすのはやめといた方が得策かと。」

「・・・分かった。」

彰も真剣な表情で答えた。

１０話（後書き）

説明難しいしグダグタ（▽；）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8462y/

バカ二人の異世界放浪

2011年12月10日23時52分発行